



Title	中学生・大学生の“自認するキャラ”を介した友人関係とセルフ・モニタリングとの関連
Author(s)	村井, 史香; 岡本, 祐子; 太田, 正義; 加藤, 弘通
Citation	子ども発達臨床研究, 15, 31-39
Issue Date	2021-03-25
DOI	10.14943/rcccd.15.31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80840
Type	bulletin (article)
File Information	040-1882-1707-15.pdf



[Instructions for use](#)

資料論文

中学生・大学生の“自認するキャラ”を介した友人関係と セルフ・モニタリングとの関連

村井 史香¹・岡本 祐子²・太田 正義³・加藤 弘通⁴

Relationship between Friendship with Self-acknowledged Kyara and Self-monitoring in Junior High School and University Students

Fumika MURAI, Yuko OKAMOTO, Masayoshi OTA, Hiromichi KATO

要 旨

本研究の目的は、自認するキャラを対象に、キャラを介したコミュニケーションとセルフ・モニタリングとの関連を検討することであった。中学生と大学生を対象に質問紙調査を行った結果、以下2点が示された。第1に、学校段階に関わらず、セルフ・モニタリングはキャラあり群の方がキャラなし群よりも高かった。第2に、キャラ行動および受け止め方とセルフ・モニタリングとの関連について、自己呈示変容能力はキャラ行動を促進し、キャラの積極的受容につながることを示された。また、自己呈示変容能力は、キャラへの拒否に負の関連を示した。一方、他者の表出行動への感受性は、キャラ行動および受け止め方とは関連がなかった。なお、この過程は学校段階に関わらず、成り立つことが示された。以上の結果から、キャラの利用は、対人場面での自己呈示に対する不安よりも、状況に応じて自身の言動を適切に調整できるという自信に基づいている可能性が示唆された。

キーワード：友人関係，“キャラ”，セルフ・モニタリング

Key words：Friendship, *Kyara*, Self-monitoring

問題と目的

現代青年の友人関係と“キャラ”

青年期は、内面を共有しあう深い友人関係を通して、自分を再構成していく時期である（岡田，2016）。また、青年期の友人関係には、安定化、

社会的スキルの学習、モデル機能の3つの機能があり（松井，1990）、児童から成人への移行期間である青年期において、友人関係が果たす役割は大きい。しかし、現代青年の友人関係は、従来のものとは異なるとの指摘もある。栗原（1989）、千石（1991）は、現代青年の友人関係の特徴とし

¹ 北海道大学大学院教育学院 博士後期課程

² HICP 東広島心理臨床研究室・広島大学名誉教授

³ 常葉大学教育学部 准教授

⁴ 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

てグループ志向が強いことや、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけ合うことを非常に恐れて、形だけの円滑な関係を求める傾向があることを指摘した。また、岡田（2010）は、現代青年の友人関係のパターンを「群れ志向群」、「関係回避群」、「気遣い関係群」の3つに分類し、その特徴を捉えようと試みた。

こうした中、友人関係のあり方を捉える一視点として、現代青年がコミュニケーションの中で用いる“キャラ”という概念が注目されている。キャラとは「キャラクター」の略語であり、「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ（千島・村上，2015）」を表す若者言葉である。キャラには、抜けた発言の多い「天然キャラ」、いつもまじめな発言や行動をする「まじめキャラ」などの例があり（瀬沼，2018）、グループ内の個人に役割を付与することによって、わかりやすく楽しい人間関係を築くことに寄与していると考えられる（千島・村上，2016）。しかし、キャラを介した関係には不適応的な面もあり、「いじられキャラ」としてからかわれているうちに、関係がいじめに発展する可能性（土井，2009；岩宮，2009）や、キャラによって自分の気持ちとは違う言動を強いられることで、友人関係に疲弊する可能性があることが問題視されてきた（岩宮，2016）。さらに、先行研究からは、友人関係の中でキャラがあることには、コミュニケーションが円滑化するというメリットがある反面、「固定観念の形成」、「言動の制限」、「キャラへのとらわれ」というデメリットがあることも示されている（千島・村上，2015）。そして、キャラを介した友人関係の影響は、学校段階によっても異なり、中学生は、キャラを演じることで心理的不適応を生じる一方（本田，2011；千島・村上，2016）、大学生では、キャラを演じることと適応との間に関連はなく、与えられたキャラを消極的にでも受け入れることが、居場所感の高さと関連していた（千島・村上，2016）。

先行研究における課題

以上の知見を踏まえ、本研究では、以下2点の課題に着目する。

第1に、キャラの決定パターンが考慮されないまま検討されてきた点である。友人グループ内でのキャラ決定には2つのパターンがあり、1つは、“キャラ作り”と呼ばれる、当人が主体的に自分のキャラを打ち出すパターン、もう一方は集団内で他律的に決定されるパターンである（瀬沼，2007）。しかし、先行研究の多くが、友人から付与されたキャラに限定して検討されており（千島・村上，2016）、当人が主体的に打ち出し、利用するキャラについての言及は極めて少ない（村井・岡本・太田・加藤，2019）。キャラの実態をより詳細に検討するためには、他者から付与されたキャラに限らず、当人が自認するキャラの検討を行う必要があると考えられる。

第2に、キャラの利用が心理的適応に与える影響は検討されているが（千島・村上，2016）、青年がキャラを利用する背景については、検討が不十分である。この点について、土井（2009）は、現代の若者にとって、コミュニケーション能力こそが自己肯定感の基盤であり、キャラは、コミュニケーションを成立させる技法の1つであると論考した。また、自己呈示への自信がなく、対人不安を抱く人にとって、キャラは対人場面での迷いを解消してくれるものであるとの指摘もある（榎本，2014）。これらの論考からは、キャラを利用する背景として、対人場面における自己呈示や、振る舞いに対する自信のなさが想定されていると考えられる。

一方で、キャラを介した関係を行う上では、自身の言動が他者からどのように認識されているかを適切に把握し、その場に応じて言動を調整する能力が不可欠とも考えられる。例えば、キャラは、仲間から承認されることで成立するものであり、自分の思いのままに勝手に設定することはできない（榎本，2014）。このとき、他者からキャラとして承認されるために、どのような言動を、どのタイミングで、どの程度行うかを判断し、実行する

必要があるだろう。また、キャラ決定後にも、「キャラがかぶる」ことや、「キャラをはみだす」ような事態は厳格に忌避されるため（斎藤，2011）、他者の反応を手がかりに、自身の言動を調整することが求められる。自己呈示の研究を参照すると、対人場面において自己呈示を注意深く観察し、それを調整・統制する能力は、「セルフ・モニタリング」と呼ばれ（Snyder, 1974）、研究が蓄積されている（安藤，1994）。キャラの維持には、その場に応じた適切な自己を演出する必要があることを踏まえると、キャラを利用する者のセルフ・モニタリングは、必ずしも低いとはいえない可能性がある。そのように考えれば、青年がキャラを利用する背景として、対人場面での自己呈示に対する不安よりも、むしろ状況に合わせて、自己呈示を変化させられるという自信が想定される可能性もある。しかし、キャラの利用と、セルフ・モニタリングとの関連は、未だ検討されていない。

本研究の目的

以上の議論を踏まえ、本研究の目的は、青年自身が“自認するキャラ”を対象とした上で、キャラを介したコミュニケーションと、セルフ・モニタリングとの関連を検討することである。具体的には、Figure 1 に示す、プロセスモデルを仮定する。まず、キャラの利用の背景にセルフ・モニタリング能力が存在することを示すため、プロセスの最初に変数を仮定する。さらに、キャラを介したコミュニケーションについては、キャラに沿った行動を行う程度を示す「キャラ行動」と自身のキャラをどのように受け止めているかを示す「キャラの受け止め方」の2つの観点（千島・村上，2016）から検討する。さらに、千島・村上（2016）において、

学校段階によってキャラの機能に差異があることが示されていることから、本研究においても中学生と大学生の比較による検討を行う。

方 法

1. 調査協力者

公立中学校1校に在籍している中学生1～3年生542名、国立総合大学1校に在籍している大学1～4年生240名の計782名を対象に質問紙調査を実施した。中学生対象者542名のうち、欠損値のある者（ $N=108$ ）を除いた、434名を対象とした（男性221名、女性213名）。大学生対象者240名のうち、研究の内容を考慮し、外国人留学生（ $N=4$ ）および欠損値のある者（ $N=17$ ）を除いた、219名を分析対象とした（男性120名、女性99名）。よって、中学生434名と大学生219名の計653名のデータを分析の対象とした。中学生の平均年齢は13.60歳（ $SD=0.97$ ）、大学生の平均年齢は19.66歳（ $SD=1.34$ ）であった。

2. 実施手続きと倫理的配慮

調査は、2017年6月～10月に行われた。授業時間やホームルームの一部を利用して、調査協力者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。調査は無記名式であり、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりすることができること、回答を拒否したり中断したりしても、調査協力者に不利益は生じないことなどを紙面に明記し、口頭でも伝えた。なお、調査は広島大学大学院教育学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施された。

3. 調査内容

1. デモグラフィック変数：年齢、性別、学年を尋ねた。
2. 現在の友人関係におけるキャラの有無と種類：“あなたには、現在の友人関係の中で、自分のキャラがありますか。最初に思いついたキャラの名前を、下の欄に書きいれてください”と教

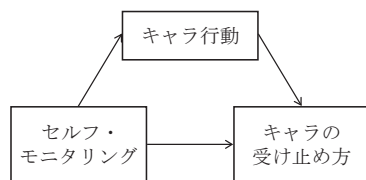


Figure 1 検討するプロセスモデル

示し、“_____キャラ”という空欄を一つ設けた。さらに、“思いつかない場合や、キャラがない場合はチェックを入れてください”と教示し、“全く思いつかない”、“キャラがない”というチェック欄を設けた。チェックを付けた者は、6以降の質問へと進むよう教示した。空欄にキャラ名を記入した者を“キャラあり群”とし、“全く思いつかない”、“キャラがない”のいずれかにチェックを付けた者を“キャラなし群”とした。

3. キャラの特徴：2でキャラがあると回答した者に対し、“質問2で回答したあなたのキャラについてお聞きします。そのキャラの特徴について説明してください”と教示し、キャラの特徴について自由記述形式で回答を求めた。
4. 自認するキャラの受け止め方（16項目）：キャラあり群において、自身のキャラをどのように受け止めているかを測定するために、千島・村上（2016）によるキャラの受け止め方尺度の表現を改変して使用した。千島・村上（2016）では、友人から付与されたキャラのみを対象にしているため、項目の文章の中に「周りが見つけた“_____キャラ”」や「“_____キャラ”と言われる」といった表現が見られる。よって、本研究においては項目の内容が変わらないよう注意しながら項目の表現を変更した。受け止め方の下位尺度は“積極的受容”、“拒否”、“消極的受容”、“無関心”の4つを想定し、4項目ずつ設定した。具体的には“質問2で回答したあなたのキャラに関してお聞きします。下に書いてあることは、今のあなたにどのくらいあてはまりますか。もっともあてはまると思う数字を1－5から選んで、一つ丸を付けてください”と教示し、5件法で回答を求めた。
5. キャラ行動（3項目）：キャラあり群において、自身のキャラに沿った振る舞いをどの程度行っているかを測定するために、千島・村上（2016）で作成されたキャラ行動尺度（3項目、5件法）を使用した。教示や回答形式は、4. キャラの受け止め方と同一とした。

6. セルフ・モニタリング尺度（13項目）：Lennox & Wolfe（1984）の改訂版セルフ・モニタリング尺度（RSMS）を堀毛・山内（1991）が翻訳したものをを用いた。相手の表出行動に敏感で洞察力に富んでいる能力を表す「他者の表出行動への感受性」（6項目）、自己呈示や表出行動を正確にモニターする能力を表す「自己呈示変容能力」（7項目）の2因子からなる。5件法で回答を求めた。

上述した尺度における5件法の回答ラベルは、全て“1. まったくあてはまらない”、“2. どちらかというとはあてはまらない”、“3. どちらともいえない”、“4. どちらかというとはあてはまる”、“5. とてもあてはまる”であった。

なお、本質問紙には以上の項目の他に、村井・岡本・太田・加藤（2019）で使用した、評価懸念尺度および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の2つの項目を含んでいた。

結 果

1. 自認するキャラの有無の割合とセルフ・モニタリング特性との関連

村井・岡本・太田・加藤（2019）での分析から、全体のデータでの現在の友人関係におけるキャラの有無の割合は、キャラあり群が51.5%、キャラなし群が48.6%であった。学校段階別では、中学生は、キャラあり群が47.9%（208名）、キャラなし群が52.1%（226名）であった。大学生では、キャラあり群が58.5%（128名）、キャラなし群が41.6%（91名）であった。続いて、学校段階とキャラの有無の割合の連関については、有意な差が見られ、中学生ではキャラなし群の出現率が高く、大学生ではキャラあり群の出現率が高いことが示された（村井・岡本・太田・加藤，2019）。

次に、学校段階とキャラの有無を要因とし、セルフ・モニタリングの「他者の表出行動への感受性」と「自己呈示変容能力」を従属変数とした2要因の分散分析を行った（Table 1）。なお、各変数の α 係数は、他者の表出行動への感受性で.79、自己

Table 1 学校段階とキャラの有無を要因とした、セルフ・モニタリングに関する得点の2要因分散分析結果

	中学生		大学生		学校段階主効果		キャラの有無主効果		交互作用	
	有	無	有	無	F 値	偏 η^2	F 値	偏 η^2	F 値	偏 η^2
他者の表出行動への感受性	3.34 (0.05)	3.10 (0.05)	3.22 (0.07)	3.05 (0.08)	1.85 $df = 1,649$	0.00	10.52 $df = 1,649$ 無<有	** 0.02	0.30 $df = 1,649$	0.00
自己呈示変容能力	3.19 (0.05)	2.96 (0.04)	3.21 (0.06)	3.03 (0.07)	0.57 $df = 1,649$	0.00	13.82 $df = 1,649$ 無<有	** 0.02	0.15 $df = 1,649$	0.00

注. 有：キャラあり群、無：キャラなし群、** $p < .01$

呈示変容能力で.76 と高かったため、各項目の加算平均を算出した。「自己呈示変容能力」の2項目については、逆転項目のため、点数が高いほど得点が低くなるようにして得点を算出した。分散分析の結果、他者の表出行動への感受性、自己呈示変容能力について、キャラの有無の主効果のみが有意であり、いずれもキャラあり群の方がキャラなし群よりも高かった。学校段階の主効果及び、すべての変数において、交互作用は示されなかった。

2. 自認するキャラの受け止め方項目とキャラ行動の分析

自認するキャラの受け止め方項目とキャラ行動尺度の分析について、村井・岡本・太田・加藤(2019)で信頼性と因子構造は確認済みであり、本研究では、分析の内容を割愛する。キャラの受け止め方項目については、他者から付与されるキャラを対象としていた千島・村上(2016)の4因子

構造とは異なり、自認するキャラの受け止め方は“積極的受容”、“拒否”、“無関心”の3因子構造となった。千島・村上(2016)で示された“消極的受容”は、本研究では示されなかったが、本研究においては、当人が自認するキャラを対象としたため、自身のキャラをやむを得ず受け入れるというパターンは示されなかった可能性が考えられる。また、学校段階ごとに比較するために、対応のない t 検定を行った結果、キャラ行動において、大学生の得点が中学生よりも高く、キャラの受け止め方は、大学生と中学生で有意差はみられないことが示された(村井・岡本・太田・加藤, 2019)。

3. パス解析

続いて、キャラあり群336名(中学生208名、大学生128名)のデータを用いて、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。パス解析に使用した変数間の相関係数をTable2に示す。中学生と

Table 2 パス解析に使用した変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1. 他者の表出行動への感受性	—	.426 **	.183 *	.079	.086	-.128
2. 自己呈示変容能力	.582 **	—	.185 *	.263 **	-.208 *	.009
3. キャラ行動	.176 *	.220 **	—	.292 **	-.021	-.203 *
4. キャラの積極的受容	.189 **	.289 **	.360 **	—	-.595 **	.086
5. キャラへの拒否	-.151 *	-.263 **	-.156 *	-.537 **	—	-.283 **
6. キャラへの無関心	.138 *	.124 †	-.076	-.040	.002	—

注1. ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注2. 左下に中学生の結果、右上に大学生の結果を示した。

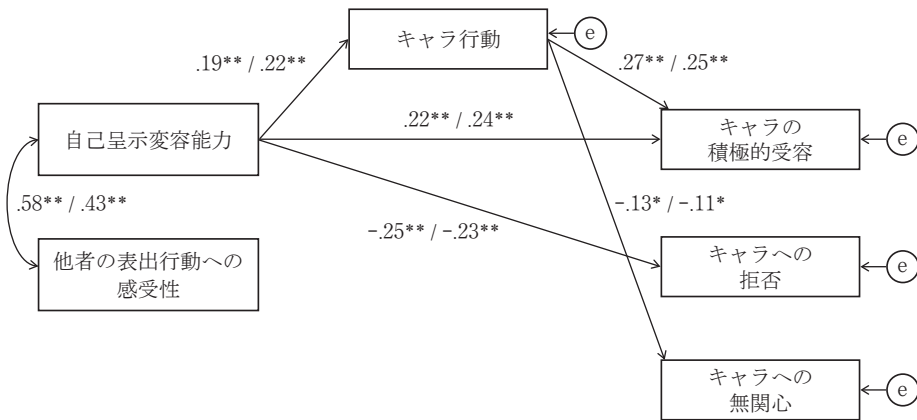


Figure 2 学校段階別の自認するキャラの受け止め方, キャラ行動, セルフ・モニタリングの関連

$\chi^2(17) = 20.00, n.s., GFI = .98, AGFI = .95, CFI = .99, RMSEA = .03, AIC = 70.00$

注 1. ** $p < .01, * p < .05$

注 2. 多母集団同時分析のパス係数に等値制約を施したモデルの結果を示した。

注 3. 図の煩雑さを避けるため、誤差間相関は省略した。

注 4. 各係数の値を、中学生 / 大学生の順で示した。

大学生のモデルの相違を検討するため、多母集団同時分析を行った (Figure 2)。両群どちらも有意でないパス係数を削除した上で、変数間のパス係数に等値制約を施し、モデル比較を行った。その結果、等値制約を施したモデルの方がよりあてはまりが良いことが示された (等値制約ありモデル $AIC = 70.00$, 等値制約なしモデル $AIC = 77.40$)。等値制約を施したモデルの適合度は、 $\chi^2(17) = 20.00, n.s., GFI = .98, AGFI = .95, CFI = .99, RMSEA = .03$ となり、モデルの十分なあてはまりが確認された。以上の結果から、中学生と大学生では同じモデルが適用できることが示された。Figure 2 をみると、自己呈示変容能力はキャラ行動と正の関連を示し、キャラ行動はキャラの積極的受容と正の関連を示している。また、自己呈示変容能力はキャラへの拒否に負の関連を示した。一方、他者の表出行動への感受性は、キャラ行動およびキャラの受け止め方との間に関連はみられなかった。このことから、学校段階に関わらず、自己呈示変容能力の高さはキャラ行動を促進し、キャラの肯定的な受け止めにつながる事が明らかとなった。

考 察

1. 結果のまとめ

本研究の目的は、青年自身が“自認するキャラ”を対象として、キャラを介したコミュニケーションとセルフ・モニタリングとの関連を検討することであった。結果から、以下2つが明らかとなった。第1に、学校段階に関わらず、セルフ・モニタリングはキャラあり群の方がキャラなし群よりも高かった。第2に、キャラ行動、キャラの受け止め方とセルフ・モニタリングとの関連について、自己呈示変容能力はキャラ行動を促進し、キャラの積極的受容につながる事が示された。また、自己呈示変容能力はキャラへの拒否に負の関連を示した。一方、他者の表出行動への感受性は、キャラ行動、キャラの受け止め方とは関連がなかった。なお、この過程は学校段階に関わらず、成り立つことが示された。以上の結果をふまえ、以下、考察を加える。

2. キャラの有無によるセルフ・モニタリングの差異

まず、キャラの有無によるセルフ・モニタリング

の差異として、キャラをもつ者のほうが持たない者よりも「他者の表出行動への感受性」及び「自己呈示変容能力」が高いことが示された。先行研究では、現代の若者にとって、コミュニケーション能力が自己肯定感の基盤であり（土井, 2009）、キャラによって対人場面での迷いが解消されることで（榎本, 2014）、コミュニケーションを行う上での心的負荷を軽減させている可能性が指摘されてきた。そして、これらの論考から、キャラを利用する背景に、対人場面における自己呈示に対する不安が想定されていると考え、検討を行った。しかし、本研究の結果から、キャラを持つ者の方が持たない者よりも、セルフ・モニタリングが高いことが明らかとなった。セルフ・モニタリングの高い者は、自身の行動が社会的状況のもとで適切であるか否かに、常に関心を抱いており、他者の振る舞いを注意深く観察し、それをガイドラインとして自分自身の行動を調整しようとする傾向がある（安藤, 1994）。また、こうした対人行動パターンは、自己を相対化し、客観視できるという点において、コミュニケーションスキルとの関連も指摘されている。畑野（2010）は、コミュニケーションに対する自信とセルフ・モニタリングとの間に正の関連がみられること、また、セルフ・モニタリングと自尊心との間にも正の関連がみられることを示した。以上の知見を踏まえると、キャラを持つ者は持たない者よりも、他者の言動に気を配り、それによって自分自身の振る舞いを調整することに長けているという認識を抱いていると考えられる。このことから、キャラを持つことの背景にあるのは、自己呈示に対する不安ではなく、むしろ、他者の反応を手がかりに、自身の言動を適切に調整することができるという自信である可能性が示唆された。

3. セルフ・モニタリングおよびキャラ行動とキャラの受け止め方との関連

次に、キャラを利用する者の中では、「自己呈示変容能力」がキャラ行動と正の関連を示し、キャラ行動によって、キャラの積極的受容が促進され

ることが明らかになった。一方、「他者の表出行動への感受性」は、キャラ行動およびキャラの受け止め方と直接の関連が示されなかった。「自己呈示変容能力」とは、周囲の求めに応じて社会的に適切な行動をとるよう、呈示する自己を調整するスキルであり、「他者の表出行動への感受性」とは、その状況で求められていることに配慮する程度を示す（吉田・高井, 2008）。つまり、キャラを用いる者の中でも特に、状況に応じて振る舞いを変化させるスキルが高いほど、キャラに沿った言動を行い、自分のキャラを肯定的に受け止めていると考えられる。一方、その場の状況に応じて、他者からの期待を正確に認知する程度は、キャラ行動や受け止め方に、直接の影響は見られなかった。この点に関しては、キャラ自体が、当人の役割や言動を規定するという性質を持つこと（千島・村上, 2015）が関連している可能性がある。つまり、キャラが決定した時点で、周囲からどのような言動が期待されているかは、当人にもある程度伝わっている可能性が高く、その場に合わせ、期待の内容を細かく察知する能力は必ずしも必要ではないのかもしれない。そのため、状況に応じて柔軟に振る舞いを調整するという行動の水準（「自己呈示変容能力」）では、キャラ行動と正の関連を示すが、状況に配慮するという認知の水準（「他者の表出行動への感受性」）では、キャラ行動と直接の関連を示さなかった可能性が考えられる。

なお、セルフ・モニタリングとキャラ行動、キャラの受け止め方との関連については、学校段階による差がみられず、中学生と大学生で同じモデルが適用できることが示された。つまり、学校段階に関わらず、「自己呈示変容能力」の高さは、キャラの利用を促進している可能性が考えられる。他者から付与されたキャラを対象に検討を行った千島・村上（2016）では、学校段階によって、キャラの利用が心理的適応にもたらす影響は異なっていた。しかし、当人が自認するキャラを対象として、キャラの利用の背景要因を検討した本研究および、村井・岡本・太田・加藤（2019）では、学校段階による差が見られなかった。研究目的の差異

も考慮に入れる必要はあるものの、キャラの尋ね方によって、学校段階による影響が異なる結果となる可能性も示唆されたため、今後の研究においては、尋ね方についても検討していく必要があるだろう。

先行研究では、他者から付与されたキャラをどのように受け止めるかという点や、キャラによってもたらされる葛藤に焦点が当てられてきた(千島・村上, 2015; 2016; 小川・佐々木, 2018)。また、論考においても、キャラのもつネガティブな側面が指摘されることが多かった。しかし、自認するキャラに着目した本研究や村井・岡本・太田・加藤(2019)から、セルフ・モニタリングの高さや賞賛獲得欲求が、キャラ行動やキャラの積極的受容を促進していることが示唆された。このように考えると、キャラには、周囲の状況に合わせて自己呈示を変化させ、積極的に自己をアピールすることで、集団適応に利用する側面もあると考えられる。今後は、付与されたキャラを受け容れるという受動的な側面に着目するだけでなく、青年自身がキャラを利用し適応していくというような主体的な側面にも着目していく必要があるだろう。

4. 本研究の課題と今後の展望

以下に、本研究の課題と今後の展望について、2点述べる。

第1に、モデルの検討である。本研究では、キャラ行動およびキャラの受け止め方の背景として、セルフ・モニタリングを位置付けた。しかし、キャラを利用することによって、セルフ・モニタリングが高まっている可能性も否定できない。どちらがより実態に即しているかについては、縦断研究や面接調査により因果関係を明確にした上で、モデルを比較検討する必要があるだろう。第2に、本研究はキャラの利用とセルフ・モニタリングとの関連を検討したが、今後はより直接的に、コミュニケーションスキル、コミュニケーションに対する自信、対人不安との関連も検討する必要があると考えられる。こうした検討を重ねることで、現代青年がキャラを介したコミュニケーションを行

う意味について、詳細に明らかにしていくことができるだろう。

文 献

- 安藤清志 (1994). 見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学—. サイエンス社.
- 千島雄太・村上達也 (2015). 現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連: “キャラ”に対する考え方を中心に. 青年心理学研究, 26, 129-146.
- 千島雄太・村上達也 (2016). 友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応: 中学生と大学生の比較. 教育心理学研究, 64, 1-12.
- 土井隆義 (2009). キャラ化する/される子どもたち: 排除型社会における新たな人間像. 岩波ブックレット 759. 岩波書店.
- 榎本博明 (2014). バラエティ番組化する人々: あなたのキャラは「自分らしい」のか?. 廣済堂出版.
- 畑野 快 (2010). 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性. 教育心理学研究, 58, 404-413.
- 本田由紀 (2011). 学校の“空気”: 若者の気分. 東京: 岩波書店.
- 堀毛一也・山内敏代 (1991). 演技と仮面—公的と私的. 大淵憲一 (監訳). 対人行動とパーソナリティ (pp.141-188) 北大路書房. (Buss. A.H. (1986). *Social Behavior and Personality*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.)
- 岩宮恵子 (2009). フツ子の子の思春期: 心理療法の現場から. 岩波書店.
- 岩宮恵子 (2016). 近頃のシシユンキ (12) 人格の着ぐるみ: ゆるくないキャラで学校を生きる. 子どもの心と学校臨床, 14, 93-97.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス—. 新曜社.
- Lennox, R. & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349-1364.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能. 斎藤耕二・菊池章夫 (編). 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化— (pp. 283-296) 川島書店.
- 村井史香・岡本祐子・太田正義・加藤弘通 (2019). 青年期における“自認するキャラ”を介した友人関係と承認欲求・評価懸念との関連. 発達心理学研究, 30, 121-131.
- 小川将司・佐々木淳 (2018). 大学生の“キャラ”と自己

- の在り方をめぐる葛藤過程. 心理臨床学研究, 35, 573-583.
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己: 現代青年の友人認知と自己の発達. 世界思想社.
- 岡田 努 (2016). 青年期の友人関係における現代性とは何か. 発達心理学研究, 27, 346-356.
- 斎藤 環 (2011). キャラクター精神分析: マンガ・文学・日本人. 筑摩書房.
- 千石 保 (1991). “まじめ”の崩壊—平成日本の若者たち—. サイマル出版.
- 瀬沼文彰 (2007). キャラ論. 東京: STUDIO CELLO.
- 瀬沼文彰 (2018). 若者たちのキャラ化のその後. 定延利之 (編). 「キャラ」概念の広がりや深まりに向けて (pp. 154-179). 三省堂.
- Snyder, M. (1974). The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変

容と精神的健康との関連: 自己概念の分化モデル再考. 実験社会心理学研究, 47, 118-133.

付 記

本研究は、第一著者が、広島大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を行ったものである。また、本研究は、村井・岡本・太田・加藤 (2019) と同一のデータセットを用いており、当該論文において一部はすでに発表されている。通常は、研究倫理の観点からひとつの研究としてまとめられるべきものとも考えられるが、本研究と村井・岡本・太田・加藤 (2019) は目的が異なっているため、また、紙面の都合もあり、別の論文としてまとめることが妥当と判断した。最後に、調査にご協力下さった中学校、大学の皆さまに感謝を申し上げます。

